

当院における維持血液透析患者の足病変の現況

医療法人財団 はまゆう会 王子病院

○天岡真由美 河村順子 大谷麻岐 渡辺千代子 瀬川 賀世子 箴島明彦 田中孝夫 市丸喜一郎

【目的】

当院における維持血液透析患者の足病変の実態を調査検討する

【対象・方法】

当院維持透析患者 243 名中、非糖尿病透析患者 156 名(平均年齢：68.1 歳、平均透析歴：14.6 年)、糖尿病透析患者 87 名(平均年齢：68.7 歳、平均透析歴：6.16 年)を対象に生活背景、下肢の循環状態、皮膚、爪について検討した。

【結果】

糖尿病患者では 96.5%、非糖尿病患者 93.5%に足病変を認めた。

透析患者全体の足病変は、多い順に 1.乾燥(65%)、2.後脛骨動脈触知不良(54%)、3.爪の肥厚(44%)であった。糖尿病の有無にかかわらず、この順位は同じだった。非糖尿病においては、冷感、白癬が糖尿病よりも多かった。生活背景については、足病変を有している患者において同居は全体の 68.2%、独居 22.1%、施設 8%だった。糖尿病と非糖尿病に有意差はなかった。

【考察】

当院においても透析患者の足病変は高率であり、非糖尿病の足病変は糖尿病と同様に高率であった。透析患者は自律神経障害による発汗減少や動脈硬化による血流障害などで乾燥や血流低下をきたしやすく、足病変のハイリスク状態であると考えられる。今後、生活状況をアセスメントし患者だけではなく家族、施設も含め指導が必要と考えられる。

【結語】

透析患者は糖尿病の有無にかかわらず足病変のハイリスク状態であり、患者の訴えがなくても定期的な観察の必要性がある。